

令和7年度 障害者等による文化芸術活動推進事業
「美術館」と「障がい」の再検討と実践の共有
事業評価レポート

評価者 常盤成紀

本稿は、一般社団法人 HAPS（以下、HAPS）が文化庁受託事業「令和7年度障害者等による文化芸術活動推進事業」として実施した「「美術館」と「障がい」の再検討と実践の共有」に対する事業評価レポートである。本レポートの執筆にあたり、以下の通り事業全体の成果検証に関する情報収集を実施した。

	未来の美術館構想講座		カンファレンス 事業	アーカイビング 事業
	もぞもぞする現 場	もぞもぞする展 覧会		
アンケート	質問項目は、令和6年度から継続する事業目標を基に評価者が原案を作成し、各事業ディレクター・コーディネーターと相談の上で確定			
現場視察	Meeting⑥視察	1/11 展示視察	視察なし	
インタビュー	参加者2名	キュレーター及び鑑賞者1名	参加者1名	
ディレクターへの聞き取り			事業内容及び成果を聞き取り	進捗を聞き取り

本事業は、公立美術館における障害者等の文化芸術活動を促進させることを目標として令和4年度から実施されている事業の4年度目にあたる。本事業では公立美術館における当事者である学芸員をはじめ美術専門家、美術あるいは福祉領域に関心がある市民などの様々な主体に対して、複数の事業毎に異なる角度・手法から働きかけることで全体として冒頭の目標に対する答えを探し、また問いを深める取り組みとなっている。各事業が単体で完結することなく相互に示唆を与え合っている本事業の特長は、過去3年度分の事業評価内容と同様である。

専門家同士のネットワーキングや知見共有を目的とする「カンファレンス事業」では、令和6年度に引き続き公募方式を採り、「やまなみ工房」（滋賀県）への視察を軸とする研修会を実施した。令和6年度に参加者から「実際の現場を訪問すること」への希望が複数見られたことへの対応でもあり、のちに確認するようにその効果は大きかった。またその中で参加

者の間では、障害がある人たちとの日常的な関わり方や、美術を媒介として社会の様々な層の人々がつながる可能性などについて考えが深まっていた。

専門知識の有無を問わず「公立美術館における障害者等の文化芸術活動」に関心を持つ市民による、未来の美術館の在り方を共に考えるコミュニティ形成を目指す「未来の美術館構想講座（もぞもぞする現場）」は、令和6年度に検討された様々な「新しい鑑賞方法」をより具体化させる試みとして、「アトリエみつしま」（京都府）で学芸員の奥村一郎氏がキュレーターとなり企画開催された展覧会「もぞもぞする展覧会」を現場として、当該鑑賞方法の開発・実践に取り組んだ。「もぞもぞする現場」参加者には、具体的な実践を企画準備するプロセスの協働により、参加者同士の関係性や「鑑賞方法」「美術館の在り方」への思考が進展していた。それは実際の展覧会あったのことであり、他方の鑑賞者やキュレーターからは改めて「鑑賞とは何か」への問い直しがあらわれていた。なお本年度は「もぞもぞする展覧会」を実施したため、令和4～6年度に実施された「パイロット事業」による展覧会の開催はなかった。

アーカイビング事業では、令和8年度以降の本格実装に向けて、各資料等の公開基準を含むアーカイブ体系に関する整理検討が行われた。その中で、各資料等を補うために追加調査、ヒアリング、インタビューの概要が明らかにされた。当該体系は各事業と無関係に構築することは不可能であり、これまでの事業進捗と並行しながら徐々に浮かび上がったものとして、今後の実装に必要な準備が整いつつある。

カンファレンス事業におけるサイトビジットの実施や、未来の美術館構想講座とパイロット事業の統合に見られるように、令和7年度はこれまでにまして、過去の実績を踏まえて一層踏み込んだ内容となっている点が大きく評価できる。また、例えば令和4年度ゲストキュレーター（パイロット事業）の藪前知子氏をカンファレンス事業のゲストスピーカーとして再起用したり、未来の美術館構想講座では「アトリエみつしま」と継続的な関係性が最大限に活用されたりしており、様々な面で事業上の蓄積が確認できる。

以上のような総評を傍証するものとして、以下個別の事業毎に、得られた価値について分析・考察する。

<各事業の定量的実績>

カンファレンス事業	実施回数：1回（令和7年8月29日） 参加者数：19名（関係者及び視察を含めて30名）
未来の美術館構想講座	<もぞもぞする現場> 実施回数：6回（令和7年8月30日～令和8年2月7日） 登録者数：もぞもぞさん14名、モニター7名 のべ参加者数：もぞもぞさん62名、モニター17名
	<もぞもぞする展覧会> 実施期間：13日（令和8年1月6日～18日）

	のべ来場者数：303名（関係者及び視察を含めて392名） トーク参加者：25名（1月10日） ワークショップ参加者：17名（1月11日～12日） もぞもぞさんスペシャル参加者：31名（1月11日）
アーカイビング事業	実装に着手

カンファレンス事業では、障害者福祉施設でありまた利用者の作品を収蔵展示するアートセンターでもある「やまなみ工房」へのサイトビジットを主な内容とした研修会を開催した。参加者は「美術館等の文化施設で勤務している学芸員」として、公立美術館で活動する学芸員をはじめ、インディペンデントキュレーターや作品販売取扱関係者など19名が参加した。一日のうちの午前中は、工房所属作家である西橋直樹氏、森雅樹氏、山本愛氏の作品を鑑賞し、感じたことをグループで共有した。この時参加者は、施設スタッフや作家（メンバー）とは会わず、アトリエにもまだ見学していない。事前の情報がない状態で作品を鑑賞し、また「正解」を知る者がいない中でお互いが率直に対話するという環境づくりが意図されていた。このことは令和6年度カンファレンス事業で実施された「チームアプローチによるケーススタディ」と連続するといえる。

午後はアトリエを訪問して制作風景を見学し、また施設スタッフからの案内を受けた。施設スタッフのオープンな姿勢のおかげで参加者は、作家（メンバー）のジャンル選択や施設スタッフとの関係性など、自分からは聞きづらい内容も知ることができたようである。そのあとは施設長の山下完和氏、藪前氏、事業ディレクターの奥山理子氏によるラウンドテーブルをきっかけとして、参加者同士がディスカッションを行った。藪前氏が、公立美術館がまだ、障害がある人の作品を「評価が定まっていない」と捉えるしかできない現状で、その作品をいかにして受け入れられるかが課題だとしたことに対して、山下氏は「やまなみ工房は何でも受け入れる」と述べ、「エイブルアートなのかアールブリュットなのかを決めるのは自分たち（やまなみ工房）じゃない」と語った。これはやまなみ工房の姿勢だけでなく、美術専門家が何に囚われているのか、囚われざるを得ないのかを浮き彫りにする意味で示唆的であったと思われる。

上記研修会の参加者に対してアンケートを実施した。その中で、【①】「障がいのある人の文化芸術活動や障がい自体について新たな学び・気づきがあった。」【②】「②「障がい」「障がい者」「福祉施設」にもっと自分でも関われる方法を探したいと思った。」【③】「③自身の経験や、自分が所属する美術館のことを客観的に振り返る機会となった。」【④】「④相談し合える相手が見つかった。あるいは、今まで得られなかった繋がりが得られた。」以上の4つについて、「そう思う」「まあそう思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「思わない」

の5段階で訊ねた。回答数は11件で、回答率は57.9%であった。なお設問中の「障がい」は表記の揺らぎではない。このことは後述する。

アンケート結果は以下の通りである。すなわち、設問①:「そう思う」90.9%、「まあそう思う」9.1%、設問②:「そう思う」63.6%、「まあそう思う」36.4%、設問③:「そう思う」45.5%、「まあそう思う」54.5%、設問④:「そう思う」36.4%、「まあそう思う」27.3%、「どちらでもない」27.3%、「あまり思わない」9.1%となり、設問①から④に進むにつれ、肯定度合いが次第に弱まっている。ただし設問④においても最も多いのは「そう思う」である。

設問①は個人的な学習成果に関する問いであり、設問②は行動意欲を測る問いである。また設問③は個人的にとどまらず所属組織に関する事柄も含まれる問いである。そして設問④はネットワーク形成の実感を測る問いである。したがって、本研修会では、従来からあまり機会がないため希望が多かったサイトビジットが素朴に大きな学びになったことがまず示されるが(【①】)、個人的な意欲と、それが所属組織等の環境でどこかで実現可能かどうかは別であるため、意欲(【②】)は学びの実感には届かず、またその要因の一つといえる所属組織に関する内省(【③】)ではさらに数値が下がっていると考えられる。

ただしそれは、内省をしていないという意味ではなく、参加者はすでに何らかの課題意識を有しており、新たな獲得というより再確認の機会となった者もいたのではないかと推測される。実際に【③】の自由記述では、自身の日頃の経験や課題意識を引き合いに出す回答が複数あった。最後に【④】は、おそらく少なくない参加者が自身を初学者であるとして、積極的に他の参加者と交流する勇気を持たず、まずは自らの学びを優先していたのではないかと推測される。実際に【②】の自由記述では、周囲はベテランであり「少し関心がある程度では関われないと感じている」といった心情が回答されていた。評価者が令和4年度から継続的に言及してきた、障害というテーマを前にして非当事者を自認する者に起きる「たじろぎ」(奥山氏の課題意識)の偏在が再確認されるといえる。本件への対応は事業に残された(根強い)課題である。

このアンケートと併せて、本研修会参加者A氏に対してインタビューを実施した。A氏は所属する公立美術館で2025年4月からラーニング・プログラムを担当する学芸員である。美術が社会からどう評価されてきたのかに関心を持つ中で、現在は「市民に開かれた美術館」を目指して、ツール開発や地域連携プログラムにも着手している。本研修会には、そうした業務へのヒントを得る目的で参加した。特に他の参加者同様、実際に制作の現場を見る機会に惹かれたという。

A氏は常々「美術が社会の中で自然と必要とされる状況とは、いかにしてつくることができるのか」を考える中で、やまなみ工房は、美術の社会実装のひとつの在り方を示していると感じたと述べた。すなわち、山下氏が「利用者が過ごしていて居心地がよい状況とは何だろうかと考えていくうちにアートにたどり着いた」と語ったことに対して、不登校の子どもや社会になじめない大人にも関係があり、やまなみ工房から得られる示唆は「障害」というテーマにとどまらないとした。

他方で A 氏もまた、障害とアートの分野には「おなじみ」の人が多く、「私みたいな素人が積極的に関わっていくには勇気がある」と吐露した。A 氏の実感からすれば「障害」ではなく別のテーマ設定にずらすことで、そうした心理的障壁を下げることはできないのかと述べた。現実、例えば A 氏は森雅樹氏の作品を観た時に「これは障害者アートなのか」と思い、当たり前だが障害がある人とそうではない人の境目も曖昧であり、別の切り口が求められるとした。これは令和 4 年度に藪前氏がパイロット事業で「ファンアート」をキュレーションの軸に設定したことにもつながる。ここでは、おそらく「障害」ではない切り口を探すことが、先述の『『障害』にとどまらない』例えば「不登校のこどもや社会になじめない大人」にも関係するような、言ってみれば美術の本来の機能やポテンシャルのようなものを探る手掛かりになるだろう。それはまたかの「評価が定まっていない」という問題に対する迂回したアプローチになるかもしれない。アンケートの自由記述でも、「作品を”障がい”という括り以外のいくつもの解釈や価値観で語れるようになると、より可能性が広がるように思った」という回答があった。その広がりによって「障害がある人の作品」を語る言語が増えれば、より多くの人とその語りに参入しやすくなるだろう。本研修会はこのように、一方でやまなみ工房自体の姿勢が「美術」の言語に囚われない社会への開放性を示し、しかし他方で障害がある人の作品を様々な解釈や価値観で語れるようになることで「美術」の言語を持つ側の参入可能性を上げるという、両方向からアプローチするがごときアイデアが示されたといえる。そしてそれは実はいずれも、「実践としての美術」が持つ本来性に関する事柄であった。

未来の美術館構想講座「もぞもぞする現場 4- 芸術と障害にかかわるひとたちの、アセンブリー」は、専門知識の有無を問わず、「公立美術館における障害者等の文化芸術活動」に関心を持つ市民による、未来の美術館の在り方を共に考えるコミュニティ形成を目的とした事業である。令和 6 年度には「アトリエみつま」と連携して、参加者がそれぞれ美術館の現状を批評し、あるいは「新しい鑑賞方法」について思考を深めた。その成果を受けて本年度は、当該「新しい鑑賞方法」を具体化するために、考案開発した手法を実際の展覧会を会場として実践した。以下、実践に参加した者を公式に倣い「もぞもぞさん」と表記し、「もぞもぞさん」とは別で「新しい鑑賞方法」を体験するために公募された参加者を「モニター」と表記する。当該展覧会「もぞもぞする展覧会」はキュレーターの奥村氏によって手掛けられたものであるが、他方で後述するように、その準備過程では「もぞもぞさん」との交流があった。

「もぞもぞさん」には計 14 名の参加があり、このうち 9 名は全 6 回のうち 5 回以上出席している。半数以上が複数年度の継続的な参加者であり、「もぞもぞさん」たちの高い熱意が伺える。評価者は今年度、最終回である Meeting⑥を視察した。当日、事業ディレクター

の佐藤和久氏は、「今年度は何よりも『もぞもぞさん』が爆誕したことがすごい」と述べた。令和4年度から時間をかけて「もぞもぞ」してきた人たちが満を持して実践家として社会に出現したことの感慨は、ひとつのことに取り組む丁寧さや時間の大切さを表しているだろう。

「もぞもぞする展覧会」にはのべ303名の来場者が訪れた。また芳名帳からの推計では、福祉関係の実務者はのべ72名訪れていた。その中には日頃介護ヘルパーに従事しながら自身は音楽家でもある来場者がいて、一度業務で来場した後日、作品を観て演奏したくなるとトランペットを持参して再度来訪した事例があった。また、来場者の中には作品鑑賞よりも「もぞもぞさん」と美術館にある課題について議論できたことが楽しかったというような人や、「もぞもぞさん」に入り口で誘われて入ってみたら思いのほか楽しんだという人がいたことがMeeting⑥で語られていた。いずれも日頃の「美術館」ではなかなか起こらない現象といえる。

本講座事業では「もぞもぞさん」「モニター」「展示来場者」の3者に対してアンケートを実施した。まず「もぞもぞさん」に対しては、Meeting①～⑥に共通する設問として、【①】「チーム内やモニターとの間で仲間や繋がりができた（深まった）と感じた。」【②】「チーム内やモニターとのやり取りから、『芸術』や『障害』に関する新たな知識や気づきを得ることができた。あるいは自分の問題関心が深まった。」【③】「もぞもぞで実施するプログラムを企画・運営する中で、チーム内で互いのアイデアを受け止め合い、よりよいプログラムづくりに積極的に取り組めた。」以上の3つについて、「そう思う」「まあそう思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「思わない」の5段階で訊ねた。Meeting⑤は運営の都合でアンケートを実施できなかった。回答率は、Meeting①②⑥が100%、Meeting④が90%（10名中9名）、Meeting③が53.8%（13名中7名）であり、③を除けばほぼ全員が回答した。

各設問の回答結果推移を以下の通り示す。

Meeting		①	②	③	④	⑤	⑥
設問①	そう思う	2	6	5	5	-	7
	まあそう思う	6	5	2	4		0
	どちらでもない	2	0	0	0		0
	あまり思わない	1	0	0	0		0
	思わない	0	0	0	0		0
設問②	そう思う	4	8	5	7	-	6
	まあそう思う	5	3	2	2		1
	どちらでもない	0	0	0	0		0
	あまり思わない	2	0	0	0		0
	思わない	0	0	0	0		0
設問③	そう思う	3	9	4	7	-	5
	まあそう思う	5	2	3	2		2

	どちらでもない	3	0	0	0	0
	あまり思わない	0	0	0	0	0
	思わない	0	0	0	0	0

※Meeting①の設問③には無効回答 1 件

設問①は、事業が進むにつれ高い肯定度合いを示し、Meeting⑥では「そう思う」が 100% となった。そもそも母数が少ないことには留意が必要だが、高い満足度を示唆している。また Meeting①で「どちらでもない」「あまり思わない」を選択したうちそれぞれ 1 名は、今年度初参加者であった。ここから令和 6 年度以前からの継続参加者には Meeting①の時点で当初から仲間意識が実感されていたといえる。設問②は、特に Meeting②以降一貫して高い肯定度合いを示している。なお、Meeting①で「あまり思わない」と回答した参加者（令和 6 年度以前からの継続参加者）はその理由として自由記述に『『障害』というくくりは難しい。』として安易に理解できるものではないという正直な回答があった。何度も参加してきた者にも学習に終わりはなく、参加者自身がそれを自覚していることを示している。

設問③もまた、特に Meeting②以降一貫して高い肯定度合いを示している。加えて「そう思う」の数が増える Meeting②④の自由記述には、アイデアを聞けたり話せたりしたこと、具体的な展覧会のイメージが湧いたこと、モニターから客観的な視点が得られたことなどの回答があった。

他方で「モニター」に対しては、彼らが参加する Meeting④～⑥に共通する設問として、【①】『『芸術』『障害』及び両者の関係性について、新たな知識や気づきを得ることができた。あるいは自分の問題関心が深まった。】【②】『『芸術』『障害』及び両者の関係性について、同じ悩みや考えを持っている人、情報交換できる人に出会えた。】【③】『『芸術』『障害』及び両者の関係性について、自分自身でも何か関連する取り組みを始めてみたいと思えた。あるいは既に取り組んでいる活動をアップデートしようと感じた。』以上の 3 つについて、「そう思う」「まあそう思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「思わない」の 5 段階で訊ねた。Meeting⑤は運営の都合でアンケートを実施できなかった。回答率は 100%であった。

各設問の回答結果推移を以下の通り示す。

Meeting		④	⑤	⑥
設問①	そう思う	3	-	4
	まあそう思う	1		0
	どちらでもない	2		0
	あまり思わない	0		0
	思わない	0		0
設問②	そう思う	1	-	1
	まあそう思う	2		2
	どちらでもない	2		0

	あまり思わない	1		0
	思わない	0		1
設問③	そう思う	4	-	2
	まあそう思う	2		2
	どちらでもない	0		0
	あまり思わない	0		0
	思わない	0		0

設問①は「もももぞさん」用の設問②と同様である。Meeting⑥の自由記述における「スタッフやもももぞさんたちが、来場された障害者やヘルパーさんと話した内容を共有してくださり、気づきを得た。みんなアートを楽しみたいし、表現したいという気持ちは、同じで、障がいの有無関係ないんだと思う。」という回答は、「もももぞさん」及び「もももぞする現場」を客観視する「モニター」としての貴重な意見である。

設問②はそこまで高い肯定度合いではなく、おそらく「モニター」自身は「もももぞさん」ではない、事業を客観的に体験する側の存在であるという意識に由来したものと思われる。他方で「もももぞさん」自身はモニターの客観的な存在にヒントをもらっており、相互作用は発生していたとみてよいだろう。

設問③は Meeting④⑥ともに高い肯定度合いを示している。Meeting④の自由記述では、「第三者的にみる経験ができ、とても勉強になりました。鑑賞する方法を変えるだけ、伝え方を変えるだけでも大変な労力があるのですね…」という回答があり、「もももぞする現場」が時間をかけて試行錯誤するその在り方自体に対する評価といえる。

評価者が視察した Meeting⑥では参加者それぞれが事業期間を振り返った。「もももぞさん」からは、『「もももぞさん」には来場者に対して『一緒にやってみない?』と誘うことができるのが大きいことだ』『ある来場者の感想が『もももぞさん』を通じて他の来場者に伝わっていくのに気づいた』のように、各自が考えた「新しい鑑賞方法」を具体的に実践する中で体感したことが共有された。また、「展覧会に在廊した日には、帰宅して家族から『なんか機嫌がいいね』といわれ、私もこの取り組みから何かをもらっている』のようにもっと素朴な感想を語る場面もあった。このように、共同で実践したことの意味を相互に共有し合う様子こそが、「もももぞする現場」が志向したコミュニティに他ならない。

以上のアンケートと併せて、事業成果を考察するために「もももぞさん」から2名、「もももぞする展覧会」鑑賞者から1名、及び展覧会キュレーターの奥村氏にそれぞれ1時間程度のインタビューを実施した。

まず「もももぞさん」からは、自身が精神科の医療施設で日々利用者と取り組む造形活動の参考になればと本事業に参加し、現在は老人介護施設で補助業務に従事するB氏（令和6年度以前からの継続参加者）と、大学でメディア表現を学び学芸員資格を取得し、令和6年度に卒業したのち、アクセシビリティと公共施設の関係に興味を持って様々な取り組みに参加するC氏（令和6年度以前からの継続参加者であるが、B氏より後に参加した）の

2名にインタビューを実施した。B氏は「もぞもぞする現場」で継続参加者と新規参加者が混じる中で、参加期間が長い人の発言が重んじられてしまうような空気にならないように気を付けたという。反対にB氏自身、長く「もぞもぞする現場」に参加する中、参加者同士が対等で、自分自身の職業や問題意識に対して年齢に関係なく敬意を払ってもらえている感覚があることを喜んでいて、それは特にC氏に対しても感じているという。他方のC氏もまた、参加者の中でかなり若い方であり参加当初は緊張していたが、同じく互いが対等に意見を交換できる空気に安心して参加できるようになったという。評価者自身C氏を知って2年目になるが、1年前よりもずいぶんリラックスして交流しているように感じる。C氏は「もぞもぞする現場」を通じて人生の先輩から様々なリアルな話を聞くことができるのが嬉しいと述べた。

B氏にとっては、座学を通じた交流を越えて、本年度は展覧会企画を協働したことが大きかった。それにより他の参加者が考えていることを理解し、ひとと自分の違いにも気づいたという。B氏は当初、展覧会を実施するなど本当にできるのかと不安だった。実現できるイメージが湧かなかつたようだ。けれども事業が進むにつれ、他の「もぞもぞさん」と交流する中で次第に展覧会の輪郭が見え、ついに「本当にできてしまった」。B氏は、「自分の不安をみんなが軽くしてくれた」と語った。

B氏もC氏も、「もぞもぞさん」の中には実にいろいろな人がいることを前向きにとらえていた。それぞれの個性を生かして「いろいろな人がそれぞれ自分の役目を背負っていく」こと、「いろいろな人がいてこそ『もぞもぞさん』だ」と述べた。B氏によれば、その「もぞもぞさん」とは、「アートのエリート集団ではないことが大切だ」とした。学芸員でも監視員でもない、一般に観に来る鑑賞者の「美術に詳しくない気持ち」が分かる市民が、一緒に作品と接しようとして持ち掛けてくる「つなぎ役」となることが重要であるとした。

またC氏によれば、職業者でない市民が何か美術に問題意識を持ったところでそれをアウトプットする機会はほとんどない。だからこそ、何か学びを行動に移したい、誰かと深く語り合いたい市民にとって「もぞもぞする現場」があつて本当に良かったと振り返った。

次に、「もぞもぞさん」と一部共同しつつ展示を構成した奥村氏へのインタビューに言及する。奥村氏はMeeting①～⑤に参加し、展示方針の共有や「もぞもぞさん」との意見交換を行った(②はオンライン参加)。奥村氏は当初、「もぞもぞさん」から提案される「新しい鑑賞方法」に対して、アイデアが先行していないだろうか、作品と対峙できているのだろうか不安な部分もあつたという。例えば音を出すといつても、ただそれが楽しいだけになってしまうのでは作品と関係がない。他方で実際に展覧会が始まれば、思いのほかよい光景が見られたとも語った。音を出したり寝転んだりという様子が、「作品と一緒にその時間を過ごしている」ようでよかったと振り返る。また「もぞもぞさん」が、そうした「作品を説明するのではないアプローチ」を鑑賞者に働きかけることで、「正しく鑑賞しなくてはならない」という「構え」のようなものを鑑賞者から見事に取り払っていたとした。

実は「もぞもぞさん」の中にはアンケートで、「作品とまずは向き合うこと。それがベースにあってその上でいろんな作品との関わりがある。音を出すことや寝ころがることがメインになってしまうと本末転倒になってしまう。という最後の話はとても大事だと思いました。そこを忘れないように運営していきたいです。」と語る者もいて、奥村氏の考え方を受け取ったうえで展覧会を迎えることができているのではないかと思われる。

奥村氏もまたB氏やC氏のように、「『もぞもぞさん』は鑑賞者と同じ立場でいることができ、一緒に作品を楽しむことができる人」だと述べた。また、作品にどうアプローチするかは自由であり、いろんな鑑賞方法があることに気づかない人もいるので、それを提案できる人（もぞもぞさん）がいることで鑑賞体験が豊かになるとした。そして何より提案される方法は、その「もぞもぞさん」本人が心動かされる方法であろうから、それを本人自身が勧めるというのもよいと語った。

奥村氏とのインタビューでは、「もぞもぞさん」の存在をめぐって、改めて「鑑賞の言語化」と「鑑賞の専門化」への示唆が浮かび上がった。まず前者について、奥村氏からすれば、「鑑賞体験を言葉にできない」としても鑑賞が浅いということではなく、その意味で従来の言語的な鑑賞方法と「もぞもぞ」的な（＝非言語的な、しかし筆談は非言語というより言語的コミュニケーションの新しいデザイン方法というべきであると思われる）鑑賞方法に優劣はない。体験を説明できなくても豊かな鑑賞ができていないということではないし、ただもし体験の中で作品を好きになれば、もっと知ろうと体験を言語的にも深めるきっかけになるだろうとした。

また後者について、何度も言及されるように「市民」と同じ目線に立てる「もぞもぞさん」のアマチュアリズムがもたらす気軽さは、鑑賞者から美術に対する構えを取り払ってくれる。他方で活動を続ければ「もぞもぞさん」であっても作品への知識は次第についていくだろう。ここにおいて本質は、各「もぞもぞさん」が作品にどれだけ詳しくても／詳しくなくても、それぞれの視点から作品を体験する姿勢に寛容であることができるかではないかと、奥村氏は語った。奥村氏によれば、詳しいから作品を鑑賞できるわけでもなく、観る人の、例えば人生や経験などによっても鑑賞体験は常に異なる。したがって、いろんな人がいろんな観方をしており、それを共有しその違いを認め合う、さまざまな鑑賞が展示室という空間で起こっている、というのが理想であるとした。このように、何より「構え」から解放されているのが「もぞもぞさん」のメタ的専門性であり、また「これはやってはいけないかもしれない」から自由になるという話は、この「もぞもぞする現場」に限らず障害がある人の作品を扱う場合一般に汎用性のあることであるといえよう。

最後に、以上のような試行錯誤及び振り返りがなされた「もぞもぞする展覧会」を訪れた鑑賞者に対して実施したインタビューに言及する。D氏は現在、所属する公立美術館で約2年エデュケーターを担当してきた学芸員である。大学では対話型鑑賞や鑑賞を通じた教育を学び、前職の美術館では彫刻を活用して視覚障害者に向けた鑑賞プログラムを企画していた。

D氏もまた鑑賞方法の多様性を探求する中で、日頃から「作品を観て、言葉になる前の物をアウトプットするってどういうことだろう」ということに関心があり、例えば今回の「作品を観て音を出す」行為は、「経験以前の感受を表現するもの」として大変興味深かったと語った。D氏は、本展覧会や本事業が「障害」を主題としていることを承知の上で、鑑賞の際には作品や作家の属性以前に、いかに目の前の作品・オブジェクトにそのままに関わるかを重視しているとした。D氏にとって鑑賞とは「作品とみる人とのコミュニケーションによって立ち現れていく、そのコミュニケーションそのもの」である。それは翻せば、今日美術館で行われる鑑賞の多くが、作品に付随した価値を見ようとする、いってみれば消費的な行為になりがちだという問題意識があるとする。その中でD氏は、展覧会の場に「もぞもぞさん」がいることで改めて作品と鑑賞者を（新しい回路で）「つなぐ」機能を果たしているとした。

D氏や奥村氏からは、美術館という制度が鑑賞の在り方をともすれば狭めてきた側面があるという問題意識の下、作品と対峙する回路を新たに開く可能性としての「もぞもぞさん」の存在意義が示唆されていた。そのアマチュアリズムは個々の「もぞもぞさん」自身の高いモチベーションに支えられていながら、他方でB氏やC氏が語ったように、その実践を実現したのは「もぞもぞする現場」自体が時間をかけて醸成してきたコミュニティ性でもあったといえる。

以上、令和7年度各事業に対する分析から確認された成果を改めて次の通り整理する。

まずカンファレンス事業では、「チームアプローチによるケーススタディ」による事前学習を経たうえでサイトビジットによる具体的な学習体験を行ったことによる学びの深まりが確認された。特にやまなみ工房の実践では、美術史上の評価に囚われることなく、施設利用者の幸福につながる活動として美術を捉え、利用者の存在を社会に接続する回路を創出する行為として、あらゆる販売や出展の機会を前向きにとらえる様子が特徴的であった。その実践からは、参加者自身にある、専門分野内部で囚われてなかなか抜け出せない概念を改めて自覚する契機となった。他方で連続する課題として、今回サイトビジットが喜ばれた背景には、障害とアートの領域は少々関心がある程度では気軽に参入できるものではないという「たじろぎ」があった。それに対しては、藪前氏によって障害がある人の作品を「障害」ではない「多様な切り口」で語る必要性と切実性が語られたように、参加者やインタビューからも同様の課題が改めて示された。その中でやまなみ工房の取り組み自体が、広く社会で様々な困難を抱えている人々と社会とを再接続する可能性としての美術という在り方を感じさせる意味で、「障害」とは異なる水準のテーマで障害当事者と関わり直すことができる汎用可能性を示唆していた。今日、「障害」をテーマとする事業が広がれば広がるほど、その実践者の思いとは裏腹に「障害」が社会で際立ってしまう。そうした課題にゆくゆくは

つながるものとして、今後はかの「多様な切り口」をより具体的に発見していく個別の実践が求められているといえる。

次に「もぞもぞする現場」「もぞもぞする展覧会」では、過去3年間に時間をかけて気づいてきた関係性及びその中で蓄積されてきた問題意識やアイデアが実践として結実する形で、展覧会の現場における「新しい鑑賞方法」が実現した。それは美術館という制度がともすれば狭めてきた鑑賞の在り方、いいかえれば人と作品とのコミュニケーションの在り方を、もう一度鑑賞者その人に戻す企てでもあった。特に、経験以前の感受を表現するものとして「もぞもぞ的な鑑賞方法」は、専門知識を前提として作品を見ることを日常としない多くの市民にとって、鑑賞の喜びを再確認できるものとなりうる。またそうした市民と同じ目線に立てる「もぞもぞさん」の「専門性」とは、作品を楽しむ資格や方法は誰にも開かれていることを鑑賞者に実感させる働きかけ方であり、それを実現するために権威的なものと適切に距離を取れる寛容さであることが分かった。そしてこの取り組みを実現させた「もぞもぞする現場」というコミュニティでは、学び合う関係性から一歩進み、参加者それぞれの個性や特技、人生経験を互いに尊重し合い、助け合う関係性へと成長が確認できたことが、最も重要な事業の果実であったといえる。

このような成果は、過去に実施されてきたリサーチ事業、パイロット事業の蓄積の上にも立っていると推察できる。今後のアーカイビング事業ではそのこと再度確認したうえで、事業成果を体系的に示すうえで追加が必要となるリサーチやインタビューの内容を精査して実施していくことが求められる。

本事業名称では奥山氏の考えで、「障害」の表記が「障がい」と改められた。奥山氏は、障害がある人の創造性や「つくる動機」は、いわゆる健常者のそれと本質的に違わない中で、「害」が用いられる文章を読んだり書いたりすることは、少なくとも自分にとっては、障害がある人が自分とは異なる存在だと強調している／されているように感じてきたと語った。今日、鑑賞方法に正解を探すのと似て、「しょうがい」とはどの字を書くのが「正解」なのか、多くの人は探したがろうとする。ここにあって自身の思考や悩みを踏まえて文字を選択しようとする行為は、それが正解かどうかよりも重要な当事者に対する向き合い方であると評価者は感じた。令和4年度報告書の通り、「障害者」「障がい者」「障害者」「感覚特性者」いずれを選択する者にも個別に意図があることを承知の上で、評価者は便宜上、文化庁事業の表記に倣い「障害者」の表記を採用している。結果的に報告書上で表記が揺らぎ、奥山氏の意図が際立つことになった。

今回様々な関係者にインタビューする中で（意外にも）共通して聞かれたこととして、無理に公立美術館を変えようとしなくてもいいのではないのか、障害がある人の作品を適切に評価して普及させるのは公立美術館の役割ではないとしてもよいのではないのか、公立美術

館には公立美術館のよさがあるのではないか、という意見があった。それはまず、どうしてもすぐには変わることができない美術館制度へのある種の無力感もあるだろう。けれども、美術館「だけ」では美術館制度が変わらないというのもまた事実である。その意味で、制度外の存在（「アトリエみつしま」のようなオルタナティブスペースなど）で成果を蓄積していく先に社会が変わり、美術館が変わるという道筋はあり得る。ただ、だからといって美術館は変わらなくてよいと、それが単なる諦めになってはいけない。オルタナティブな存在が新たな社会を提示する中で、それでは美術館は改めて何ができるかを考えることが大事だとD氏も述べていた。

美術に限る話ではなく、何かの制度の内部にいる人間は、外部の人間からは共感できないような身動きのとれなさを実感しながら日々の営みを続けているということが多い。それは、内部の人間が制度を再生産する再帰性の構造に組み込まれているからともいえる。だからこそ、その再帰的な規範に完全に飲み込まれてしまわないように、常に考えたり、外部の人間とつながったりと、制度に小さな穴をあけ続けていくことが大切なのだろう。そうした先に、気づけば社会が変わっている、美術館が変わっているとよいと心から思う。